

平成30年度 第3回小田原市社会教育委員会会議概要

- 1 日 時：平成31年2月14日（木） 14：00～16：00
- 2 会 場：小田原市生涯学習センター本館 視聴覚室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、岩瀬委員、齊藤委員、佐久間委員、高橋委員、田中委員、深野委員、益田委員
- 4 職 員：安藤文化部長、遠藤文化部副部長、樋口生涯学習課長、鈴木文化財課長、古矢図書館長、尾沢スポーツ課長、吉野青少年課長
(事務局)
相澤主査
- 5 傍聴者：1名

6 概 要

1 文化部長挨拶

安藤文化部長が挨拶をした。

2 報告事項

(1) 平成30年度主要な社会教育事業の結果及び予定について

資料1に沿って順次各所管課長が報告をした。

(2) 小田原市生涯学習センター豊川分館・上府中分館の管理運営について

資料2に沿って、生涯学習課長が報告をした。

【深野委員】 豊川分館と上府中分館は、自治会が運営するというのだが、そもそも老朽化しているということで分館を廃止したのだと思う。そこを自治会が使用しても大丈夫なのか。補修等は必要ないのか。

【生涯学習課長】 両分館については、すでにかなり老朽化が進んでいる。補修については、暫定利用であるため、今後長い期間は使わないということで、例えば耐震補強等、大きな補修は行わないが、雨風に対する屋根の補修、あるいは壁の補修、あるいは雨どいを直す等、部分的な補修は行っていきたいと考えている。

【深野委員】 それは自治会に丸投げということではなく、市が行うということか。

【生涯学習課長】 市が行うということである。

【木村議長】 豊川・上府中分館の利用頻度が高いと先ほど生涯学習課長からお話があった。まだ小学校にも空き教室がないということで、これらの分館がなくなってしまうと、コミュニティが崩れてしまう。最終的には地域コミュニティ活動の場は小学校に移っていくのだが、それまでの間は、暫定利用をお願いし

たいということである。最終的に小学校に移るのがいつになるかということとはわからないが、それまで建物がもってくればよいのだが。

(3) 平成31年度予算概要について

資料3に沿って、安藤文化部長が報告をした。

- 【木村議長】 資料3のナンバー18「学校体育施設開放事業」についてだが、確か去年は小学校の学校プール開放が、全小学校では実施できなかった。それほど違ってないが、昨年よりは予算額が減っている。これで小田原市内の小学校のプールを開放できるのかお聞きしたい。
- 【スポーツ課長】 昨年、プールの監視員の委託料が高騰してしまったことで、プール開放ができなかった学校が3校あった。これを受けて、30年度から金額を上げた。上げたことにより、事業ができなかった学校はなくなった。プール開放については、30年度、31年度ともに同じ金額を計上している。今年度実施できたので、31年度についても問題なく実施できると考えている。
- 【木村議長】 同じ市内の小学校で、できないところもあった。子どもが少ない学校はどうしても金額が上がってこないで、そこまで監視員を呼ばなかったということだとは思っている。小田原市内のどこの小学校でも実施できるような体制をとらないといけない。日数的には少なくなっても、全く開放しないよりは、一週間であれば一週間、開放できるようなシステムを作っていないといけない。子どもたちが夏休みに全くプールに入れないというのはやはりかわいそうなので、そのあたりはしっかりとしてもらいたい。
- 【益田委員】 3校実施できなかったというのは、予算の問題だけではなく、業者がうまく決まらなかったという面もある。昨年度と今年度は、できるだけ全校開放の方向で考えているが、プール開放にはお金がとてかかるので、将来的にはやめていこうという学校が出てくるのは必至かもしれない。3校が実施できなかったというのは、学校が小さいからできなかったというわけではない。確かに予算の面では苦しいので、今後考えていただきたいと思う。
- 【深野委員】 予算というよりも中身の話で恐縮だが、資料3のナンバー11「官民協働によるまちづくり担い手育成事業」について質問する。31年度はおだわら市民学校2年目で、実践的な学びの場となると聞いているが、32年度以降も長期的に続ける予定なのか。1年目に55人の応募があったということだが、31年度の様子をみると、どのくらい持続するのかある程度わかると思うのだが。担い手育成が事業の目標であるので、育成した人が何を担っていくのか、それを実際に担ってくださるのか、そこが事業評価として一番重要なポイントかと思う。予算は予算でよいが、31年度の事業計画の中に、今後の

事業活動評価の予想を検討する項目がいずれ必要になるのではないかと思う。継続的な人材育成の場としての工夫を検討していただきたいと思う。

【生涯学習課長】 おだわら市民学校では、1年目で小田原全般について学び、2年目で専門課程ということで、福祉、経済、農業、二宮尊徳など、自分が関心を持ち、その道で自分ができることは何かと考え学び、2年間で卒業していただく。我々としては、例えば既存の団体に入る、あるいは自分たちで新たな活動を作るなど、この方々がその後どういう活動をしていったのかをきちんと見守っていかねばならないと考えている。31年度をもって初めて卒業生が出てくるので、深野委員がおっしゃるとおり、31年度中に事業の成果をどう測っていくのかを考えていきたいと思う。今年度55名の方に受講していただき、そのうち半分の方は自分の学びの欲求を満たすために受講しているという印象を持っている。来年度は二期生が入ってくるが、この講座を通して少しでも、自分ができることは何かを考えるという意識付けができればと思う。

【木村議長】 卒業生が地域に戻ってくれたら、一番ありがたいが、果たしてそうなるかどうか。他のところに行って活動されたら何にもならない。小田原でお金をかけて一所懸命事業を行っているのだから、卒業したらなるべく小田原に残って活動してもらいたいというのが、我々が切に願っていることである。

【笹井副議長】 キャンパスおだわら事業の予算が極端に減っているのはなぜか。

【生涯学習課長】 減額分については、生涯学習センターけやきの受付事務については、臨時職員を雇用し運営しているが、いままではその経費をキャンパスおだわら事業の中に入れていた。しかし今後は、生涯学習センターの管理と一体化させ、生涯学習センターの経費でみるべきであろうということで、受付事務に係る経費をそのまま生涯学習センター経費に移したものである。キャンパスおだわら事業の予算額としては減額になっているが、キャンパスおだわら事業そのものが縮小したというわけではない。

(4) 小田原市図書館条例の一部改正等について

資料4に沿って、図書館長が報告をした。

【笹井副議長】 小田原駅東口図書館には、かもめ図書館のような愛称をつけるお考えがあるのか。また、指定管理者の指定にあたって、司書が何人いなければならないかなど、管理者に何か義務付けを考えているかどうかお聞きしたい。

【図書館長】 これまでも多くの方から愛称が欲しいというご意見をいただいている。今、図書館が入る建物全体で愛称が募集されるかどうか、次に子育て支援施設と一体化したフロアとして愛称をつけるかどうか、そして図書館自体に愛称を

つけるかどうか。どの形にしろ、我々としても何かしらの愛称をつけることも考えている。指定管理者については、これから選定委員会の方で、どのような仕様にするか検討していただくところであるが、図書館協議会の方でも、事前に内容について要望していきたいというお声をいただいている。おそらく司書等の配置についても、ここでご意見をいただいて、反映していく形になると考えている。

【木村議長】 他市では図書館の指定管理者の関係でいろいろとあったと聞く。今は落ち着いているかもしれないが、小田原市ではそういったことがないようにしていただきたいと思う。

3 協議事項

(1) 平成31年度社会教育関係団体への補助金について

資料5に沿って、各所管課長が説明をした。

【木村議長】 私は富水に住んでいるが、富水の子ども会が全て休会になってしまった。原因は、役員の仕事が多すぎるからということだった。例えば保険担当だとか、いろいろな役が多すぎると。自治会の方で補助金を出す関係で、一度子ども会を廃止してしまうと、今後復活させることが大変である。そこで休会という扱いにしてもらえないかということで、こちらも慰留はしているがほとんど全滅の状態である。地区の自治会連合会では、自治会で面倒をみようかという話が出ている。会費も取らず、連合会で行事を組み立て、連合会でお金を出し、小学生は誰でもおいでという形でやろうかと話を進めている。他の地区でもそういうところが出てきていると聞いている。私としては、やはり子ども会はないと困ると思っている。スポーツができる、何ができると、そういう子どもはいいのだが、家の中に閉じこもっているだけという子どもができるのは良くない。そういう子どものためにも子ども会は必要だと思う。みなそういう認識はしていると思うが、親が担う役が多いから、子ども会に入るのは嫌だという。子どもが小学校5年生まではよいが、6年生になると役が回ってくるから、難しい。そういった話が出てきているが、ではどうしていくのか。青少年課にもそういった相談をしようかと思っていた。小田原市の方でも、そういう子どものことも考えて、子ども会を存続させていかなければならない。どの団体でも、自治会でもみな役はやりたくない。PTAでもそうだと思うが、役が来たから仕方なくやっているのが実情だと思う。こうして補助金まで出していて、休会が多くなるというのはやはり原因があると思う。それは役をやるのが嫌で辞めていくのか。地区としても子どもが子ども会に入っていないというのは困ると思うので、青少年課の方でも何かい

い方法があれば、よろしくお願ひしたい。

【高橋委員】 子どもが小学校高学年になると保護者に役が回ってくるということは以前から発生していたこと。今問題になっているのは、加入率がどんどん下がっていること。親の都合ということもあるが、子ども会の活動自体、昔のように行事が多くないということもある。子どもたちは、サッカー、ミニバスなどのクラブチームへは率先して行く。クラブチームの方が役などの親の負担がずっと大きいのが現状であるのに、親もお金を出してクラブへ行かせている。地域の関わりが希薄になってくるので、いずれ自治会に影響が波及してくると思う。地域活動のベースにある子ども会組織の加入率をいかに上げていくか。そこから成長するにつれ、PTA なり地域の役員などになるという、昔のルールがあったのだが、今はそうもいかなくなってきた。まちづくり委員、地域コミュニティの中で議論していても、そういった問題にどうやって対応していったらいいのか、取り組んでいったらいいのか、という部分が一番の課題として上がっている。子ども会の加盟率というのは50%を切っているのではないか。

【青少年課長】 平成30年4月の状況で小田原市内の加入率は34%である。25学区あり、学区の連合で休会しているところが4地区ある。足柄、山玉、曾我、前羽になる。小学校自体、児童が少ない地区もあるが、大きい地区でも、役員の負担や、子ども自身がスポーツクラブや習い事などの活動をさせていて子ども会には入らないということで、加入率が落ちていると私も見ている。役員の負担軽減のためにも、青少年課でも単位子ども会にアドバイスさせていただいている。また子どもが子ども会に該当する年齢の保護者だけでなく、卒業されてある程度余裕があるような方々にも子ども会の活動にご協力いただくような体制ができれば一番いいのではないかと思っている。休会したいというお話があったときには、もう一度地域の方で、そういった方々をあたっていただくとか、役員の負担軽減になるように活動内容を見直していただくなどアドバイスはしているが、実情ではなかなか難しいと感じている。

【木村議長】 いろいろ要因はあるが、個人情報の問題もあると思う。昔は、小学校にあがる子どものことについて、全部小学校が教えてくれた。今は、そういったところが一切絶たれてしまった。組長のところだと、自分の周りの小学校にあがる子どものことはわかると思うが、上の方の人はほとんどわからない。どこに子どもがいるのかとか、どこの子なのかということがわからない。地域内のつながりが希薄になっていることは事実。それは自治会も悪いのだが、そこをどうやっていくのか。子ども会はなくしてはいけないというのは分かっているのだが、母親達と話をしても、嫌だと思ったら、こちらの言うことは全く聞いてもらえない。それをどうにかしたいと思っているのだが。社会

教育委員会議の中で、なにかいい方法がないか、取り上げていければと思う。

【益田委員】 私の入っている単位自治会の子ども会の加入率は、およそ80%である。行事だと、ほぼ100%の参加率である。クラブで忙しいという子どもたちもいるので、その子どもたちのことも考えて、夕方以降に行事を開催するとか、どうやったら子どもたちが参加できるかを考えている。親が役員をやるのが嫌なら、やれる人がやればいい。友だち同士でやればいいし、みんなでやればいい。小規模だからできることかもしれないが、できる人がやっている。役員でない人も手伝っている。やはり人と人との関係だと思っていて、役員が嫌だというのは、付き合いたくない人がいるということ。地域ごとに仲良くする、顔が見えるようにしていくと、自然に子どもたちも集まる。ほとんどの子が地域のお囃子に来ている。ただ、そこから先が問題で、子ども会がうまくいっていても、その先の自治会活動につながっているかというつながっておらず、課題もたくさんある。ただ、子ども会に関しては、母親達が仲良くできる雰囲気を作ることが大切である。どの地域も、自治会長と母親達の関係性を良くしていくことから考えていかなければならないのではないかと、常々思っている。

【齊藤委員】 益田委員と全く逆の立場からお話させていただく。一つは、PTAもそうであるし、子ども会もそうだが、なぜ参加するのは母親でなければならないのかということ。働く母親の立場からすると、生きていくだけで、仕事をしているだけできゅうきゅうとしている。そんなことに時間を割いている余裕がないというのが実情である。もう一つは、PTAはまさにそうだが、会議が平日の昼間に開催されていること。出られるわけがないという攻撃されるという暗黙のルールがある。働いている女性にそんな時間があるのかと思ってしまう。小田原の事情はわからないが、一般論で言えば、子どもがやることは子どもが自分で準備すればいい。小学校の高学年であれば、自分が参加したい行事は自分が準備をすればいいということを促す大人が何人かいればよい。子どもをお客さんにしないということが、世界的な方向でもある。そういう方向に子ども会を仕立てた方がいいのではないかとというのが一つの考え方である。もう一つは、もうそろそろ母親達を対象にするというのはやめたらどうかということである。土日に、暇でテレビを見ている父親達にもっと参加してもらい、母親達を解放する状況にした方がいいのではないかと。父親の参画というのが今の地域参画の流れでもある。ワークライフバランスの関係で、中年の男性たちの働く時間が少なくなっている中で、何かやろうという中年層は確実に増えている。そういう階層を掘り出していくということをや地道にやっていく方がいいのではないかと。みんな余裕がなくて、地域活動に参加しないと攻撃されるのでは、ますます面倒くさくなるという

状況がある。昔と同じようにはできない社会になっている。それほどお金にも時間にも余裕のない世帯が増えているという現状もある。そういった中で、地域の子ども会活動をどうやっていくか、子ども自身が考えていった方がよい。多世代であった方がよいし、中学生や高校生の中からそういったことを企画してくれるようなメンバーが出てくると、子ども若者参画という社会の動きに追従できてよいのではないかと思う。

【田中委員】 我が家は共働きだが、子どもが小学6年生のときに、妻を犠牲にして子ども会会長を妻が引き受けた。そういう立場から、反省も含めて耳が痛い話であった。昨日の下府中のまちづくり委員会には市長も出席され、子ども会のこと話題になっていた。大きな課題は二つ。目的と役員かと思う。目的は、地域による青少年の育成や、横の連携、縦の連携等というところにつながるかと思う。当然、活動内容も、より魅力的なものを考えておられるのだろうが、実際にはそこまでいたらなかったり、そうでなかったりしている。だが、そういった子ども同士のつながりの中でコミュニケーション能力が高まったりする。役員については、子どもが高学年になったときに、保護者が役員を受ける受けないで、子ども会を抜けてしまうこともある。そこで、そろそろ保護者に任せるのではなく、自治会が代わりにやるという発想もあるとお聞きした。25学区の連合があり、そのうち4つが休会ということは、子どももそうだが、もしかしたら親側のコミュニケーションの苦手さなどが原因かもしれないと感じた。木村議長がおっしゃるように簡単に解決できることではないが、子ども会が礎となって自治会などの大きな組織になっていくので、そこから離れていくことを危惧されている方がたくさんいる。そこを強めていく手立てや、何らかのきっかけを作っていかなければいけない時期に来ているのではないかと思う。

【益田委員】 最近、男性、父親も子ども会活動に来てくださる。各家庭にもよるとは思うが、みんなで自治会全部を巻き込んで楽しく活動できるとよい。自治会だとか子ども会だとかを分けたり、婦人部、青年部いろいろ作ってしまうからいけない。自治会としての活動としてやっていけばよいのではないかと思う。

【木村議長】 自治会にいろいろな部があり、何か行事を行うと、母親も子どもを連れて来てくれる。しかし、一つの輪に入るとだめになる。子ども会なら子ども会、婦人会なら婦人会で集まって話をしてくれとなるとだめになる。子ども会は社会教育の中の一つだと思う。確かに色々なケースがあると思うが、皆さんのお知恵をお借りして、小田原市から子ども会がなくならないように考えたいと思っている。

(2) 平成31年度神奈川県社会教育委員連絡協議会地区研究会について

資料6に沿って、生涯学習課長が説明をした。

【木村議長】 4月の年度変わりで委員が変わる可能性がある方、また、11月の予定が分かる方はできれば早くその旨を事務局の方に伝えていただきたい。地区研究会の会場は生涯学習センターけやきのホールになるかと思うが、その予約も必要になる。

アトラクションについては、他の市町村がやっていたからやらなければならないというものではないと思う。小田原らしく、人権講話、基調講演、事例発表でちょうどよい時間になると思う。ここでアトラクションを入れると、何を入れなければならないのか事務局が大変になるし、お金もかかる。なるべくお金がかからないようにやりたいのだが、アトラクションについてはどうか。

【深野委員】 地区研究会には私も毎回出ているのだが、非常に興味深いのは、小田原市の社会教育委員会議は特殊だということ。例えば、真鶴のような小さな町の世界社会教育委員会議は独自に活動している。委員たちが集まって、自分たちで何か行動をしている。松田町などもそうである。社会教育委員の役割が市町村によって異なることがよくわかる。小田原市は中途半端である。横浜や川崎のように大きいわけでもなく、真鶴や松田のようにすごく小さいわけでもない。それでこういうテーマでこういう取り組みになっているのだと思う。それはそれで他の市町村の委員の参考になると思うが、大事なのは小田原市としての切り口である。この小田原市の社会教育委員がどういう切り口で議論して、どういう成果をあげたのかということとをぜひアピールしてもらいたい。人口20万人弱の都市の世界社会教育委員がどういう課題に取り組んで、市としてどういう課題に取り組もうとしているのか、ということ伝えることが非常に重要だと思う。

アトラクションについては、あまりおもしろくないことも多いが、茅ヶ崎のクラシックバレエはインパクトがあった。茅ヶ崎にこういうバレエ団があるということを知った。そういう意味でも、各市町村が自分のまちの宣伝の場に使っていることが多い。二宮尊徳をはじめとして、小田原は材料が多い。民族芸能もたくさんある。せっかくの機会なので紹介してもよいのではないかと私は思う。他の市の方が小田原市の民俗芸能を知る機会があってもいいのかなと思う。話ばかりで、パイプ椅子に座り続けるのはつらい。気分転換や休憩を入れないと。お話される先生方の選定には何の異論もない。

【木村議長】 アトラクションでも、民俗芸能や踊りなどをやるのなら、外郎の口上などどうか。小田原らしいといえば小田原らしい。

【生涯学習課長】 今年度小田原市で開催した、全国報徳サミットの際に、前振りとして寿獅子

舞をやっていただいた。民俗芸能的なものを入れたとしても、時間内には収まらと思う。

【木村議長】 それは10分くらいだったか。

【生涯学習課長】 そのくらいかと思う。

【高橋委員】 今回初めて委員になり、茅ヶ崎の研究会に参加したが、こんなことをするのかとびっくりした。今回は市民会館のような椅子で長時間過ごしたが、それほどお尻が痛いということはない。来年度は会場がけやきのホールだという前提であれば、途中で休憩のような息抜きを入れないと辛いのではないかと思う。基調講演から90分座ったままで、しかも首を壇上に向けて聞いているわけだから。ただのトイレ休憩ではなく、その休憩時間に何か息抜きをして、緊張をほぐしてもらおうとよい。その辺が検討の余地があると思う。

【齊藤委員】 私個人の状況だと、11月はすでに予定が多々あるので、日程を決めていたきたいのが一つ目。二つ目に、テーマが一番大事かと思う。私の中では、やはり小田原らしいテーマという「文化」である。文化こそが小田原の宝だと思っている。テーマが一番大事なので、そのテーマを絞り込んだ方がよいと思う。茅ヶ崎の例を見ると、テーマは公民館を連携させる、他施設を連携させるということで、事例も含めテーマを貫いている。伊勢原は、歴史と健康と2本立てだった。今回の小田原市では、テーマは、人権講話から笹井先生のお話から、事例から、一つのキーワードでつないでいくようにするのか、あるいはバラバラに動いていくのか。今の話の内容だと、バラバラな印象である。テーマがバラバラになると、印象に残りにくいので、研究会が終わったあとに小田原っていいまちだったという印象を残すような着地点が必要かと思う。私のような市外の人間が見たいと思うのは、やはりアトラクションである。同じ神奈川県民でも小田原の伝統文化は知らないことのほうが多い。短時間でもインパクトが残せるようなものがよい。地域でボランティアでやってくれる方たちもいると思う。

【益田委員】 アトラクションというものは、この地区研究会の中心というか、イメージの中心になっている。いろいろな地区研究会を見たが、何が印象に残っているかという全部アトラクションである。逆に言うと、下手なアトラクションを打ってしまうと、小田原はこうなのかというマイナスのイメージを持たれてしまう危険性もある。アトラクションをやる時は、くれぐれも慎重に選ばないといけない。以前清川村の地区研究会に参加した。清川村は小さな村だが、地元の竜神祭の竜が出てきて、女性たちが踊るというアトラクションをやっていてとてもよかった。竜神祭については全く知らなかったのだが、清川村にはこんな文化があるのかということがずっと入ってきた。小田原にはインパクトがあるものがたくさんある。

- 【木村議長】 そういうものは探せばたくさんある。あとは日程が合うかどうか。アトラクションを入れるということであれば、それはまた全体の時間構成を考えればよいということである。長くて10分くらいか。
- 【生涯学習課長】 10分から15分くらいかと思う。
- 【木村議長】 では、10分くらいということで。
- 【有賀委員】 アトラクションのタイミングについてだが、伊勢原のように人権講話のあと、研究会の間に入れた方がよい。最初に入れるとそれだけで終わってしまう。アトラクションを入れるタイミングを考えた方がよい。
- 【木村議長】 今のスケジュールだと、人権講話のあとに10分休憩がある。これをアトラクションにして、基調講演か事例発表のあとに休憩を挟んで事例発表を二つ続けるのはどうか。
- 【生涯学習課長】 舞台転換もあるので、全体をやりくりしながら調整させていただく。
- 【木村議長】 では具体的な調整については事務局にお願いします。
- 【有賀委員】 事例発表者として質問してもよろしいか。私は小田原市における放課後子ども教室の取り組みについて、パワーポイントと、酒匂小学校の子どもたちの教室での様子を動画で発表しようかと思っている。時間的には30分を予定している。ただ、私は子ども教室のコーディネーターの立場として小田原市の取り組みや実態をお伝えすることは可能だが、先ほど齊藤委員が言われたテーマとの繋がりや社会教育との関わりというまとめの部分については、今後皆さんと一緒に考えていただきたいと思う。茅ヶ崎の流れを見ると、事例発表のあとにまとめという部分がある。事例発表としては様々でも、ここで一つのまとめをしっかりとできればと思う。前回の会議資料にあったが、テーマは「学びがつなぐ小田原のまちづくり」で決定なのか。
- 【生涯学習課長】 あくまでも仮称なので、もう少しかみくだいて私のイメージを申し上げると、地域資源を活用した人づくりまちづくりというものが心の根底にある。そういった視点からのお話を齊藤委員にお願いした。その地域資源の中に文化というものがあるだろうし、小田原市固有の地域性など様々なものが包含されている。それをもう少し柔らかく、どう表現するのかというのがあるが、根底には地域資源を活かした人づくりまちづくりということがある。ただ、そのままだと硬いので、それをどう表現するのかということだと思っている。
- 【有賀委員】 最後は事例発表がテーマにつながるようなまとめの部分を作ってきちんと報告しないといけないと思う。
- 【木村議長】 私も有賀委員の意見に賛成である。ローカルな話題だったとしても、具体的にこんな活動をしていると参考になるような、できるだけ具体的な事例発表をした方がよいと思う。ただ、有賀委員が言われるように、あまりにも具体的すぎるとバラバラになるので、最後にまとめあげる。一見バラバラに思わ

れるかもしれませんが、串が一本通っていると、最後のまとめで知っていただければと思う。

【生涯学習課長】 茅ヶ崎市はまとめに最後の10分間取っている。社会教育委員会議議長がまとめられている。私は茅ヶ崎の研究会を見てはいないのだが、これは最終的には串の部分が表現されたということか。

【深野委員】 そうである。

【木村議長】 やはり現実にやっていることを入れたほうが、見ている方には分かりやすい。ただ、そうすると事例がつながってこない。それなら事例1、事例2はそれぞれそこで切る。それでいいと思う。こういう事例発表が二つある。一番良いのはつながっているような事例があることだが、そこまでやるのは大変だと思うので。

【深野委員】 研究会の最初に事例の位置づけを説明するという方法もある。この事例発表は小田原市としての取り組みの中のこういう中のこういう位置づけがあれば、事例1と事例2が違う内容でも良い。

【木村議長】 大体ここで筋書きはできた。事務局から地区研究会のために生涯学習センターを仮予約している日を聞いたので、お伝えする。都合が良い日があれば、事務局に連絡してもらい、調整したい。11月5日(火)、6日(水)、11日(月)、12日(火)、13日(水)、14日(木)、18日(月)、19日(火)の8日間、事務局で仮押さえしている。4月に入って予定が分かった時点で事務局にご連絡いただきたい。

次の会議は5月頃になるかと思うが、その前に日程を押しえたいのでよろしくお願ひしたい。また、年度代わりで4月から新しい方に委員が変わる場合は、次の方にも伝えていただくようお願ひしたい。

今日のことをまとめて、事務局の方で時間調整して、もう一度5月に議題として話し合っていきたいと思う。

5月の次が8月の予定なので、その時点では、事例発表者の方にはできればまとめておいていただければと思う。ほか、事務局から何かあるか。

(次回の会議は5月を予定している旨事務局が説明をした。)

【木村議長】 それでは本日の会議はこれをもって閉会とさせていただきます。